

疑いと関係なく

マタイ28:16~20 / 李正雨師

神様の言葉を信頼するのは、容易ではないことだと思います。最初の人であったアダムとエバも、蛇の言葉を聞いて神様を信頼しませんでした。彼らの心には、疑いというものが芽生え、彼らは、善悪の知識の木の実を食べることになりました。これがまさに罪であり、この罪によって死がこの世に流れ込みました。神様についての疑いが生じて、罪と死が私たちのところに入るようになったのです。そこで、私たちが信仰の人としてしなければならないのは、疑いを捨てて神様のみを信頼することです。それが私たちが行くべき道であり、目指すべきことです。しかし、私たちの中の疑いがそれほど簡単に消えるわけではないでしょう。神様を徹底的に信頼しなければならないということは知っていますが、心の中に生じる疑いを防ぐのはとても難しいです。それで使徒パウロは、ローマの信徒への手紙7章24-25節でこう言います。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか…わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。」

おそらくこのような悩みは、私たちが神の国に入るまで続いていくのだと思います。疑いと信頼の回復。これを繰り返すのがほとんどの信仰の人の姿だと思います。今日の福音書でも、このような人々が登場します。私の考えでは、彼らは、この世で最も驚くべき出来事を目撃した人々だと思います。復活なさったイエス様と出会った弟子たちがまさに彼らです。しかし、弟子たちの何人かは、自分の目の前におられるイエス様の復活を信じていません。今日の福音書17節の言葉です。「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。」弟子たちの何人かがイエス様の復活を疑ったことには、いくつかの合理的な理由があると思います。復活後のイエス様の姿が変わっているからということもあり、死から生き返ることを信じられないからということもあるでしょう。あるいは、自分の逃亡によってイエス様の死を直接確認できなかったということもあるでしょう。このような様々な理由によって、弟子たちは復活されたイエス様と直接出会いましたが、何人かは、復活のことを疑っていたということです。

本当に皮肉な言葉だと思います。もちろん、弟子たちがイエス様の復活を信じられない状況に置かれていたとはいえ、復活されたイエス様の御前で復活を信じられない弟子たちも、不思議です。ところが、これだけではありません。イエス様は、十字架につけられる前に、何度も弟子たちにご自分の死と復活について言われました。今日の福音書も「十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った(16節)」という言葉から始まり、マタイによる福音書28章32節にも「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」と書かれています。イエス様はご自分の死と復活だけでなく、復活後に弟子たちと出会う場所までも話しておかれたのです。それにもかかわらず、何人かの弟子たちは、イエス様の復活を受け入れず、疑っていたのです。

私はこの御言葉を読んで、疑いというものがどれほど大きな力を持っているかを悟りました。復活の出来事を見ていましたが、疑う弟子たち、神様と直接話を交わすことができたにもかかわらず、神様の言葉を疑ったアダムとエバ、宣教において大きな成功を収めたにもかかわらず、自分を罪の法則に仕える惨めな人間だと話す使徒パウロ。聖書が彼らを通して私たちに教えているのは、単に疑うなというのではなく、疑いがもっている大きな力についてではないでしょうか。さらに、今日の福音書で弟子たちはみんな山にいました。マタイによる福音書での山は、イエス様の教えと祈りなど、神様の御心が知らされる場所であり、旧約聖書での山は、神様と出会ったり、律法を授与されたりする聖なる意味を持っている場所でした。ところがマタイ福音書の著者は、そのような山であっても、弟子たちは復活されたイエス様を見ても復活を疑っていたと語っています。これは、疑いは私たちがコントロールできないものだということを示していることだと思います。

ます。

私たちは、信仰生活をしながら様々な疑いと出会っていると思います。恐れと人間の知識と未知の将来などによって、神様の言葉について疑いをもっています。神様を信頼して聖書が真理だと信じたいですが、信仰生活においては、いつも躊躇して葛藤の中にいます。それで、神様に対して申し訳ない気持ちと罪の意識をもって信仰生活をしています。このような信仰の姿は悪いとは言えないと思います。神様の御前で謙虚になり、神様の恵みのみを求めることになるからです。しかし、これによって私たちが神様の御前で罪の意識だけを持つようになったら、神様のことをいつも恐れているなら、これも良い信仰だとは言えないでしょう。神様が私たち信徒に求められるのは、恐れと罪の意識だけではないからです。私たちがこの体を住みかとしているかぎりには、疑いというものを完全にコントロールすることはできないと思います。私たちの知恵では、神様のことを理解することができず、私たちに何が起こるか、私たちがどう変わっていくかが分からないからです。しかし、確かなことは、このような疑いにもかかわらず、神様は私たちを愛されて選ばれ、私たちを通してお働きになるということです。

今日の福音書でも、これがよく現れていると思います。復活されたイエス様を見ても、何人かの弟子たちは疑いました。しかし、イエス様はご自分のことを疑っている彼らに悔い改めを求めています。ご自分の前にひれ伏した弟子たちだけでなく、疑っている弟子たちにも、天と地の一切の権能がご自分にあることをもう一度教えてください。そして弟子たちみんなをこの世に派遣なさいました。疑っている弟子と信仰深い弟子を区別しませんでした。疑いをもっている、そうではなくても関係なく、弟子たちみんなをご自分のためにこの世にお遣わしになったのです。そして、この派遣はご自分の意志だけではないことを示しておられます。「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい(19~20節)。」父と子と聖霊。三位一体の神様が疑っている弟子たちも、この世に派遣なされたのです。

もし疑うのが悪いことであり、罪を犯すことであったなら、弟子たちは、三位一体の神様の御名によって派遣されなかったのだと思います。派遣される前にイエス様から叱られたかもしれません。しかし、疑う人もそうではない人も派遣され、イエス様は派遣されたすべての弟子たちといつも共にいると約束してくださいました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる(20節)。」これが私たちみんなに向けられた主の約束であり、同時に疑う人々のための慰めと希望のメッセージであったと思います。疑いによって気を落とす人、罪の意識にとらわれている人たちにも、主はいつも共におられます。

1994年、神学校の1学期、私は生まれて初めて神様に対して疑いが生じました。それまでの間は、疑いなく信仰生活をしましたが、神学校に入って神学を勉強しながら、神様に対して疑いが生じたのです。それで、そのことによってかなり長い時間悩み、自分の深くない信仰を残念に思いました。そして今も、神様に対する疑いは、無くなったわけではありません。しかしイエス様は、このような私も弟子として受け入れられ、また他の国に派遣されました。疑いをもっていますが、他の信仰深い人と同じく私を使ってくださいましたのです。皆様も同じだと思います。私たちの中には、信仰深い人も、疑いを持っている人もいます。しかし、イエス様は差別しておられません。みんなをご自分の弟子とし、三位一体の神の御名によって福音を宣べ伝えるようにしてくださいました。また、この世の終わりまで、いつも私たちと共におられるのです。これによって私たちは、結局アブラハムのようにイエス様に従うのです。そして、私たちもアブラハムのような信仰の先祖になるのです。この驚くべきイエス様の恵みが三位一体の主日、ここに集まった皆様と共にありますように。神様の愛と聖霊の交わりが私たちのことを導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン